

十勝岳

○62-II火口周辺域の比抵抗構造

2009年9月、62-II火口周辺域においてAMT法（可聴帯域MT法）による比抵抗探査を行った。62-II火口を取り囲む5地点で得られた電磁場応答を用いて、フォワード計算による予察的な3次元比抵抗構造解析を行った。

深さ100m程度までの浅部には、現在噴気活動が見られる62-II火口や大正火口壁に対応して、数十Ωmの低比抵抗が分布している。これに加えて、62-II火口付近の深さ約150 - 650 mには、さらに低比抵抗（0.5Ωm）の柱状領域が示唆された（図中のC）。地磁気変化から推定される消磁源（気象庁他、第114回予知連資料）は、この領域Cの最上部に位置し、GPSから推定されている膨張源（気象庁、第114回予知連資料）は領域Cの下部にあたる。領域Cの低比抵抗は、62-II火口の火道およびその周辺部の状態を反映したものであると考えられる。現時点では測定点の数が少なく、推定された比抵抗構造は断定的なものではない。

なお、現地での測定にあたっては、札幌管区气象台・女満別地磁気観測所・道立地質研・北大理地感システム講座の協力を得た。

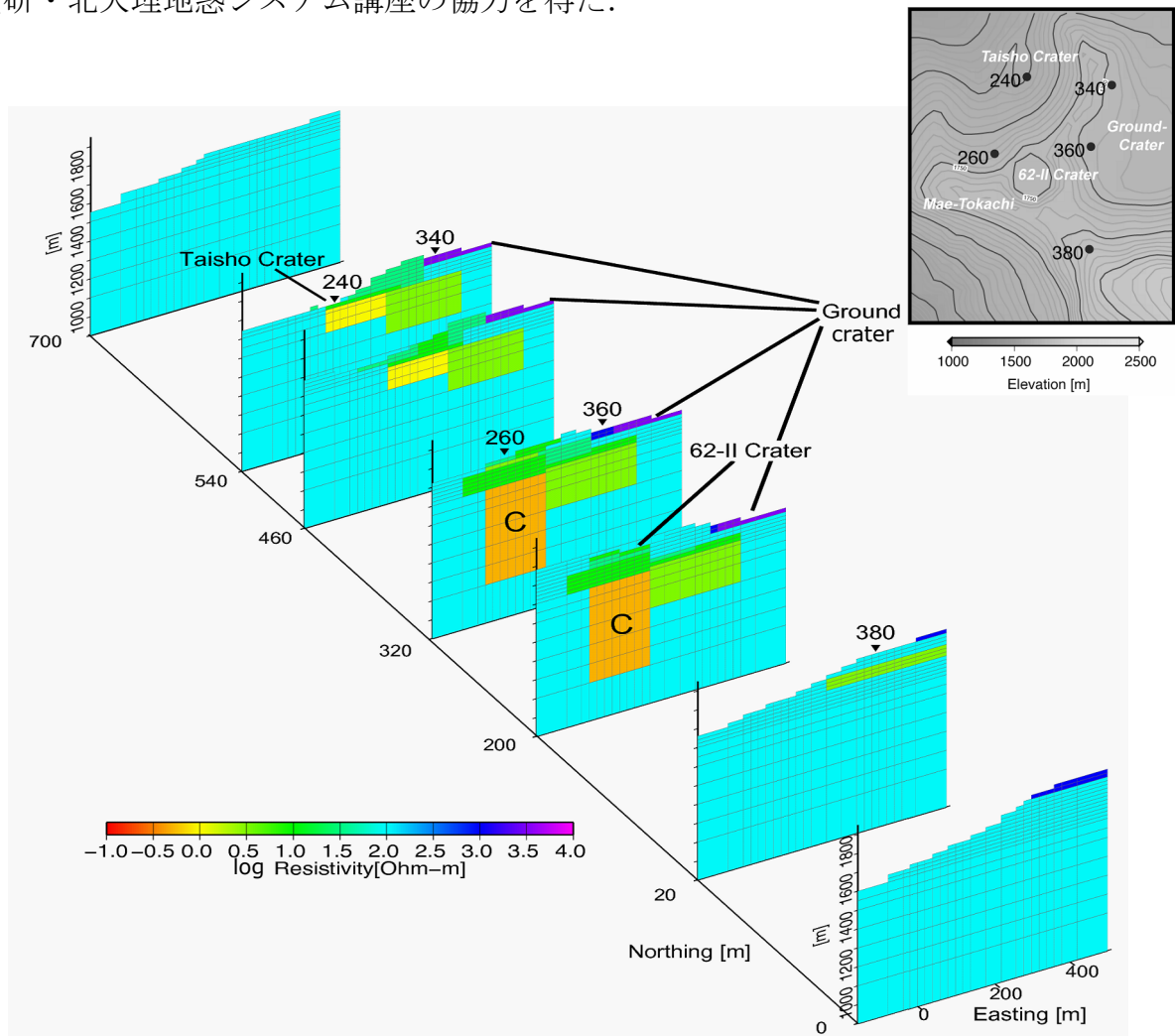


図1 3次元フォワードモデリングにより推定された比抵抗構造。比抵抗値は対数表示である。測点図の作成にあたり、国土地理院発行の10mメッシュ基盤地図情報を使用した。

(山谷・茂木・橋本)